

NHK 連続テレビ小説

清水有生
村川純ノヘライズ
作

ドラマ小説
下巻

NHK出版

NHK 連続テレビ小説

苏工业学院图书馆
藏书章

ドラマ小説
下巻

清水有生 作
村川純 ノベライズ

NHK出版

ドラマ小説 すずらん 下巻

1999年8月30日 第1刷発行

著者 清水有生（作）
村川 純（ノベライズ）

発行者 安藤龍男
発行所 日本放送出版協会
〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町41-1
TEL 03-3780-3384（編集）
TEL 03-3780-3339（営業）
振替00110-1-49701

印刷・製本 大日本印刷

©Yuki Shimizu & Jun Murakawa

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁本がございましたらお取り替えいたします。
定価はカバーに表示しております。

本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権の侵害になります。
ISBN4-14-005322-4 C0093

インターネットで当社の出版情報を提供しています。
<http://www.nhk-grp.co.jp/npb/npbtop.html>



NHK 連続テレビ小説

ドラマ小説
下巻

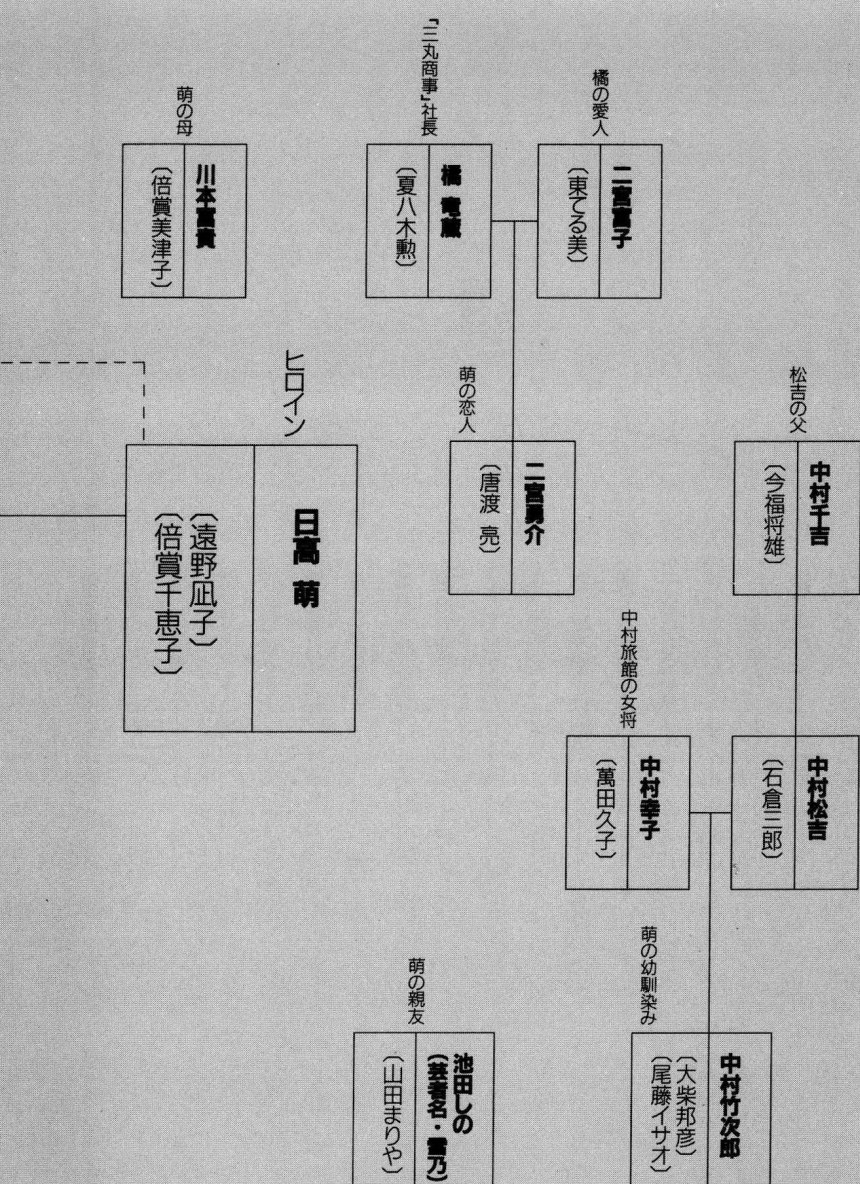
清水有生 作
村川純 ノベライズ

この作品はNHK連続テレビ小説「すずらん」の第九十七回から最終回までの台本を元に小説化したものです。
内容が放送と異なる場合も「ございますので、ご了承ください。

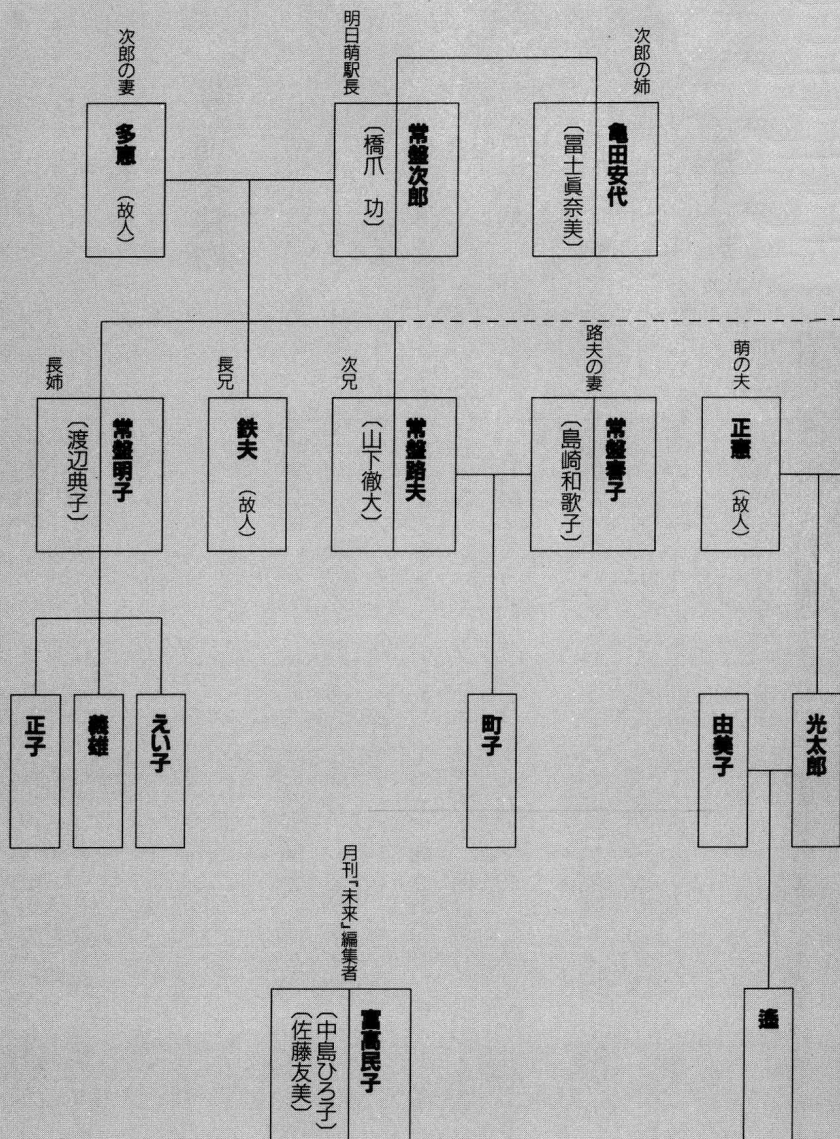
装丁 野村道子
表紙写真 坂井信彦
編集協力 福井理加
校正 鶴田万里子

目次

母を捜す旅路	6
運命のいたずら?	16
橘との因縁	29
知らなくていいこと	37
探し求めた答え	46
落盤事故の真相	60
優しい贈り物	69
愛情と憎しみ	81
絶望の淵で	95
それぞれの想い	105
本当の幸せ	114
思い出を抱き締めて	123
勇介からの手紙	141
子供たちの笑顔	153
好きだから	159
共に過ごす日	177
夢に向かつて	189
リターン・オブ・ハピネス	211



きよ子 (松原智恵子) …浅草の芸者置屋「鶴^{つる}廻^{まわ}家」の女将。粹でお茶目
 あやめ (鈴木砂羽) ……「鶴廻家」の芸者。空手三段、瓦割りで客を魅了?
 小梅 (犬山犬子) ……「鶴廻家」の芸者。鮎の中骨抜きを得意とする
 小夏 (山川恵里佳) ……「鶴廻家」に新しく入った芸者見習い



岩波尚助 (小野武彦) ……代議士となっても皆に「町長」と親しまれている
 横田康雄 (うじきつよし) ……写真館の主。明日萌の町の語り部的存在となる
 山岡千代 (山下容莉枝) ……幸福学園の園長先生。17年前の罪に苦しんでいる
 佐々木すみ (絵沢萌子) ……さわの死後、閉鎖された幸福学園を山岡と再建

——お母さんの名前、川本富貴さんっていったよね。あたしの知り合いで君栄姐さんって人が、一か月ほど前に街でばったり会ったんだって……萌ちゃん、一緒に捜してあげるから、東京においでよ。

母を捜す旅路

幼馴染みの池田しのから、母が東京にいるかもしれないとの話を聞き、萌が再び上京を決意したのは昭和二十四年二月のことだった。六歳の光太郎を連れた萌は、しのが身を寄せている浅草の芸者置屋、『鶴廻家』に住み込ませてもらい、そこで賄いの仕事をしながら、母を捜すことになった。しかし、母・富貴は住んでいたところをすでに引き払っており、残された唯一の手がかりは、血を吐いてどこかの病院に入院しているらしいということだけである。萌は毎日、しのと手分けしていくつもの病院を訪ねたが、一か月経っても入院先は見つからなかった。二人の前に広げてある地図にはバツ印が増えるばかりだ。

「これでこのあたりの病院は全部あたったわけだね……どこか郊外の病院に入院したのかな」
そうは言ったものの、しのは落ち込んではいられないと、気持ち奮い立たせる。

「明日もう一度、君栄姐さんに聞いてみよう。何か思い出してくれるかもしれない。萌ちゃん、諦めちゃだめだよ」

「うん、ありがとう。本当にしのちゃんには感謝してる……」

そこへ、玄関から「ただいま」という声が聞こえてきた。鶴廻家の女将、きよ子が帰ってきたの

だ。『蛍の光』を口ずさみながら部屋へ入るなり、きよ子は一人でダンスを踊り出す。家の空気がふんわりと華やぐようだ。

「あ、萌ちゃん、素晴らしかったのよ、今日の映画」

迎えに出た萌の手をいきなり取ると、きよ子は楽しそうにダンスを踊り続ける。

この日、銀座でロバート・テイラーとビビアン・リー主演の映画『哀愁』を観てきたきよ子は、流行のこの映画をいち早くお座敷に取り入れようと、あれこれ考えをめぐらせているようだ。というのも、新しもの好きのきよ子は、奇抜なアイデアをお座敷に持ち込んで売りものにしていったのだ。特に映画が好きで、お気に入りの一場面を寸劇にして芸者衆にやらせることがよくあった。

きよ子は早速、あやめ、小梅、雪乃の三人を呼び集める。しのは鶴廼家では「雪乃」という名前と呼ばれる、売れっ子芸者だ。しのと小梅がきよ子に台詞を細かく教えられ、懸命に演技する。だが、どんな悲恋の物語でも、終わりはいつも空手三段のあやめの瓦割りかわわりで締めくくる、そんなきよ子のちぐはぐな演出を、萌と光太郎は笑いを噛み殺して脇で見ていた。

突飛なひらめきとわがままで周囲を振り回すきよ子と、内心うんざりして文句を言いながらも、毎回仕方なくきよ子に付き合う芸者衆。個性豊かな鶴廼家の人たちのおおらかさが、萌は大好きだった。母親捜しは進まなかったが、こうして萌にも「おかあさん」と呼べる人ができたのだった。

翌日、しのが連絡をとってくれて、君栄姐さんと近くの喫茶店で会えることになった。萌の真剣な眼差しを受けて、君栄は富貴がいなくなった時のことをゆっくりと語り始めた。

「……あたしが訪ねた時には、もう、部屋はもぬけの殻でさ、大家さんに聞いたら、入院が長引く

から引き払ったって。どこの病院なのかは、大家さんも聞かなかったって……大家さんには会ったんでしょ？ 何か言つてなかった、富貴さんのこと？」

「ええ、何も……。引き払うっていつでも、大した荷物はなかったって」

しのが答える横で、萌は富貴が住んでいたアパートを訪ねた時のことを思い返していた。引き払う時にはなにがしかの家財道具があったはずだが、それを運び出す現場を誰も見ていなかったのだと萌が説明すると、君栄が思いがけないことを言う。

「きつと運送屋さんに頼んだのよ。まさか、荷物まで救急車ってこともないだろうからさ……」

「救急車？」

「そうよ。富貴さん、救急車で入院したんだから。あれ？ 前にそれ言わなかったっけ？」

君栄の答えに、萌は弾かれたように立ち上がった。そして、しのと顔を見合わせて同時に叫んだ。「消防署ね！」

君栄に礼を言い喫茶店を飛び出した二人は、その足で消防署に向かう。川本富貴という女性が救急車で運ばれた病院を調べてほしいと頼んでみたところ、消防署の職員は親切に対応してくれた。はどなく、当時の記録からその病院がわかったと鶴廻屋に連絡が入った。駒形橋のたもとにある『駒形病院』だという。

すぐに萌は光太郎を連れて、しのと一緒にその病院へ向かった。しかし、時すでに遅く、富貴は二週間前に退院したという。がつくりと肩を落とす萌に、しのはかける言葉もない。富貴が入院していたという病室に案内された萌たちは、同室だったという女性に話を聞くことができた。

「そうだね……あんまりしゃべらない人だったね。特に自分のことは何も……いつも悲しそうな顔

をして、そのベッドから窓の外を見ていたつけ……」

萌は、空いている窓際のベッドに近寄り、感慨深げにたたずんでいる。そして、諦め顔で帰り支度をしていると、その女性がふと光太郎の胸元の小さな木彫りの人形を見て、思い出したようにつぶやいた。

「それ、あの人も持っていたね。もつと大きいやつだったけど……珍しい人形なんで、聞いたたら、お守りの人形なんだって言ってたね。何だか昔、駅の人にもらった……そう言ってたよ」

衝撃的な事実を得て、萌としのは鶴廻屋に戻った。

「どうして萌ちゃんのお母さんが駅長さんの人形を持っていたんだろ？ それって、駅長さんとお母さんは会っていたということなの？」

「あたしが十歳の時に一度会ってるわ。でも、その時人形を渡したなんて、一度も聞いたことないわ。父は明日萌から旅立つ花嫁さんにしか、人形は渡さないもの」

「……ということは、お母さんは明日萌の人？」

「だったら、会った時に気がつくはずでしょ？」

「そうよね。だとすると、駅長さんからもらった人に、お母さんがもらったとか……でも、駅の人からもらったって言ってたよねえ。萌ちゃん、早く駅長さんに心当たりを聞いてみれば」

その時、玄関から郵便配達員の声が出た。小包の差出人は次郎である。包みを解くと、中からきちんと折り畳まれた子供用の学生服と帽子が出てきた。添えられていた手紙には、甥の義雄が入学式で使ったものだが、明子と相談して送ることにしたので、よかったら光太郎に着せてやってほしいと書かれていた。嬉しそうに服を手取る萌を眺めながら、しのが感慨深げにつぶやく。

「そうか、光太郎ちゃん、もうじき小学校だもんね。忘れてたわ」

早速、萌が光太郎に着せると、あつらえたようにぴったりだった。次郎と明子の思いやりにあらためて感激した萌は、次郎に電話を入れることにした。

「お父さん……今日、光太郎の服と帽子が届きました。ありがとうございます。ええ、ちょうどいい寸法だったわ。とても似合うのよ。明子姉さんにもよろしく伝えてください」

「そうか……お古だから、どうかと思っただが、気に入ってくれてよかった。ところで、お母さんについて何か手がかりはあったのか？」

「そのことなんだけど、実はね……」

萌から木彫りの人形の一件について聞いた次郎は、頭を抱えてしばらく駅員室の机で考え込んでいた。その様子を見かけた幸子きさこが、待合室から声をかける。

「どうしたの、駅長さん？ 何だか怖い顔してるけど」

「うん……さっき、萌から電話があつてね。母親が入院していた病院がわかったそうなんだ。ところが、萌たちが駆けつけた時には、もう退院した後で、その先はわからないらしい。だけど……なぜか私の木彫りの人形を持っていたらしいんだ」

「それ、どういうこと？」

「わからん……ただ、あの人に人形を渡した覚えはないんだが……とにかく調べてみよう。業務日誌に全部書いてあるから、何かわかるかもしれない」

次郎は立ち上がると、日誌を保管してある倉庫に向かった。

その日の夜、駅員室の机に過去の日誌が積み上げられていた。人形を渡した女性を探す作業が始められたのだ。花嫁を送り出した日のページを次郎と幸子が探し、その花嫁の名前を竹次郎と横田が書き写していく。

「しかし、駅長も大したもんだな。こんなにたくさん、花嫁さんを送り出していたのか……」

「そりや、駅長さん、この駅に来て二十年以上だからね……ええと、萌ちゃんがこの駅に置かれてたのが、大正十二年の一月だから、それより前に人形を渡した花嫁さんを探せばいいのよね」

「どうしてだ、母ちゃん？」

「だってそうでしょ。萌ちゃんは、この子を頼むっていう手紙と一緒に、この駅に置き去りにされたのよ。初めから駅長さんに頼むつもりだったのよ。だとしたら、それ以前に駅長さんと会って、人形を受け取っていたということでしょ？」

みんなの作業は夜を徹して続けられた。

その頃、鶴廻屋ではちよつとした事件が起こっていた。昼から上野のデパートに出かけていたきよ子が、大きな包みを抱えて帰ってきた。

「萌ちゃん、これ見て。どう、素敵でしょ？　ねッ。思わず買っちゃったわよ」

きよ子は誇らしげに言いながら、光太郎の入学式用に揃えたという新品の洋服と帽子を箱から取り出した。きよ子の気持ちは嬉しかったが、萌は困惑していた。

夕食後、部屋でその服を見つめる萌のもとに、あやめと小梅、しのの三人がやってきた。

「おかあさんにも困ったもんよね」

「そうね。何だか、札束に物言わせてるって感じよね」

あやめの意見に小梅が同調し、しのも次郎の送ってくれた服のほうに心がこもっていいと言いつ出す。すると、普段からきよ子の身勝手さに閉口していたあやめが、日頃の鬱憤（うづがへん）を晴らすかのようにな、上気して続けた。

「光太郎の入学式の服、決まっていなければ、差し出がましいけど、あたしが買ってあげたいんだけど、迷惑かしらって聞くのが普通じゃない。結局、おかあさん、自分が一番なのね。どうせ、自分が可愛がるものが欲しくなっただけなんですよ。ねえ、小梅ちゃん……どうしたの？」

小梅は震えており、その表情はこわばっている。不思議に思ってたあやめが振り返ると、悲しげに唇を噛み、目にいっぱい涙をためながら恨めしそうにあやめを睨んでいるきよ子が立っていた。

「あッ、この服素敵ッ。きつと光太郎ちゃんに似合うわよ。ねッ、萌ちゃん……」

慌ててあやめは取り繕うが、きよ子は力一杯襖（ふすま）を閉めると泣きながら走り去っていく。三人は氣まずそうに黙り込み、部屋を出ていった。残された萌は、部屋に吊るされた二着の服をしばらくの間交互に見つめていた。

昭和二十四年四月、光太郎の入学式の日がやってきた。その日は朝から、きよ子が萌に自慢の着物を着付けている。

「いいわあ。これ、空襲の時、防空壕に入れておいて助かったの。西陣よ。やっぱり違うわ……」

「おかあさん、本当にありがとうございます」

居間では、光太郎と三人の芸者衆が萌を待っていた。

「萌ちゃん、すっかり見違えちゃったわね。どう、光太郎もすっかり立派になったでしょ？」

あやめが嬉しそうに光太郎の背中を押した。

「それじゃ、行ってきます」

自分があつらえた服を着た光太郎と萌が出かけていくのを、玄関先できよ子は満足そうな表情で見送っている。そんなきよ子を横目に、あやめは萌に近寄ってそっと耳打ちをした。

「何もおかあさんに義理立てしなくてもよかったのに」

「そういうんじゃないんです。おかあさんの心遣いが本当に嬉しかったから……」

「そう……じゃ、行つてらっしゃい」

その頃、明日萌駅では、業務日誌から花嫁の名前を拾い出す作業が終わり、彼女たちの行方捜しの段階に入っていた。横田は、写真館に保管してあったネガから焼き直した花嫁の写真を、次郎の前に並べる。幸子も興味深げに覗き込む。

「これが、稲見トキさん。こっちが、山本絹子さん。駅長さん、この二人、間違いないこの駅から嫁いで人形も手渡されてるんだけど、弘前と富山に嫁いでいて消息が確認できないんだ。どう？」

しばらく写真を見て考えていた次郎は、やがて残念そうにかぶりを振った。

「二人とも違うな」

幸子は、花嫁リストの中のこの二人の名前を消し込んで、思わずため息をつく。そこへ竹次郎が息を切らして戻ってきた。

「どうだった？」

「大島トシエ、沼田にいた。一度も東京へは行つてねえ。今も駅長からもらった人形を大事に持ってた……」

消息がわからないのは、残り三人になった。次郎、横田、そして幸子も沈痛な面持ちで肩を落とし、駅員室は重苦しい空気に包まれた。そんな雰囲気を持ち破るように、竹次郎が明るい声を出す。「もう一度、聞いて歩くべ。何か手がかりがあるかもしれねえ」

「そうだな」

横田も気を取り直して明るい表情に戻り、竹次郎と表に出ようとする。

「みんな、すまないな」

「ナンも。萌のおふくろが見つかるともしれねえんだ。どうってことねえ。さ、行くべ」

二人はやがて、駅前広場に消えていった。

「ありがとう、幸子さん……」

次郎が潤んだ目で礼を言うと、幸子は微笑んだ。

「さ、もうすぐ下り列車が来るわよ。支度しなきゃ」

幸子は待合室に戻り、駅弁販売の準備を始めるのだった。

数日後の鶴廻家――。

朝からひどい頭痛に苦しんでいるのが、頭を抱えてうなづいている。萌がしのに薬を飲ませていると、きよ子が帰ってきた。

「ためだわ。よその置屋さんも手一杯だつて……」